

歴史の授業における英語の活用の試み

與田 純*

Using English in History Lessons

Yoda Jun

Abstract

筆者は10年以上にわたって、英米の歴史教科書からの英文を、歴史（世界史、日本史）の試験で使用している。このような独特の試みを実施することになった経緯や狙い、実施方法、課題などを報告する。また、今回の報告に合わせて、学生たちにアンケートを実施した。アンケート結果から、今後の改善点などを検討したい。

Keywords: 英語、試験、歴史教科書

1. はじめに

「ジョアン・オブ・アルク (Joan of Arc) って誰？」カナダ留学中に、講義の中で出てきた Joan of Arc という歴史上の人物の名前を聞いたときの、筆者の反応である。隣席の学生に尋ねてみると、この人物は15世紀に活躍したフランスの女性指揮官で、神の啓示を受けて従軍し、フランス王の戴冠に貢献、最後はイングランド軍によって火刑に処された等々、とのこと。「なんだ、ジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc) のことか」と、ようやく合点がいった。彼女はフランス人であるため、日本の歴史教育ではフランス語読みの名前が教えられるのだが、英会話で Jeanne d'Arc の呼び名を使っても、相手には伝わらない。歴史上の出来事や人物の名前の英語表現を知っておくことが、学校で学んだ歴史の知識を英語コミュニケーションで活かすうえで、必須であることを痛感した次第である。

筆者は、勤務先の香川高専高松キャンパスで「歴史Ⅰ」(1年生対象、世界史。令和元年度以降は「社会Ⅰ」に名称変更)、「歴史Ⅱ」(2年生対象、日本史)、「人文科学Ⅰ」(4年生対象、世界史 or 日本史)を担当しているが、10年以上前から、すべての担当科目の定期試験

に英文を用いた問題を導入している。本稿では、歴史の授業に英文を活用することに至った経緯や狙い、実践の方法を紹介するとともに、これに伴う様々な課題をどのように対処していくべきかを検討する。

2. 経緯と狙い

筆者が歴史の授業に英語の活用を取り入れる理由として、以下の3つを挙げる。

まず第1に、「はじめに」でも触れたように、世界情勢を論じたり、日本の歴史を紹介したりするなど、歴史の知識を英語コミュニケーションで活かすには、歴史用語の英語表現を知っておくことが必須だからである。例えば、「(アメリカ)南北戦争」「日中戦争」「日本海海戦」などの用語を、South-North War, Japan-China War, Battle of Japanese Sea などと、そのまま英語に置き換えても意味は通じない(正解は、(American) Civil War, Second Sino-Japanese War, Battle of Tsushima)。

第2に、外国の歴史教科書を読み込むことで、国による歴史観の違い - 例えば、日米決戦に至る経緯や広島・長崎への原爆投下に関する、日米の歴史教科書の記述の相違など - を体感させることである。あるいは、100年前の英米の教科書の記述と現代のもの - 例えば、コロンブスの新大陸「発見」の記述や、イギリスのイン

* 香川高等専門学校専攻科 一般教育科

ド支配に関する記述一を読み比べることで、歴史上の出来事に対する評価が、時代により変化していくことを認識させることもできる。

第3に、最も重要な理由であるが、高専生の英語力の向上である。高専によって違いはあるものの、平均して高専生の英語力が同年代の高校生よりも低いことは、つとに指摘されているところである。また本校誌間キャンパスを対象にしたアンケート調査によれば、英語に否定的な回答が対象者の半分近くを占めていた(水野、2015)。高松キャンパスについても、後述するアンケート結果からも明らかのように、英語に苦手意識や抵抗感をもっている高専生は同様に多いようである。英語の学習を英語教科に限ることなく、他教科でも英語に触れる機会を設けることが、高専生の英語力向上に繋がるとの認識から、本キャンパスでは5年以上前から、一般科目であれ専門科目であれ、大半の科目の試験に英語の知識を一部組み込む試みが行われている。歴史の試験に英語の長文を取り入れるという筆者の手法は、これに先駆けるものであったと自負している。

3. 実践方法

筆者が担当する「歴史Ⅰ」(「社会Ⅰ」)、「歴史Ⅱ」、「人文科学Ⅰ」では、年4回の定期試験すべてで、英語の長文読解を取り入れている。英語を用いるのは定期試験の時のみで、普段の授業では、Reformation(宗教改革)、Declaration of Independence(アメリカ独立宣言)、Convention of Kanagawa(日米和親条約)など、重要な歴史用語の英語表現を紹介する程度にとどめている。

正直なところ、英文を活用しながら授業を進めたいところだが、その場合、全員が英文の内容を理解しておく必要がある。そこで、事前の和訳を宿題として課してみると、やってこない者が多い。提出を義務付けると、他人の訳の丸写しを提出する者が出てくる。かといって、授業中に和訳する時間を取る余裕はない。否応なく、全員が和訳に取り組むよう仕向けるには、試験で活用する以外にない、というのが現在の結論である。

英文は、試験日の2週間程度前を目安に事前配布し、試験当日までに、辞書なしで読めるように準備しておくことを指示している。また、必ず自分で和訳すること、和訳に関する質問はいつでも受け付ける旨を伝えている。英文は、「歴史Ⅰ(社会Ⅰ)」(世界史)の場合はアメリカ、イギリスの小・中等学校の歴史教科書からの抜粋である。「歴史Ⅱ」(日本史)の場合も、なるべく英米の教科書から引用しているが、日本の記述は(日

中戦争や太平洋戦争を除くと)限られているため、海外読者に日本の歴史を英文で紹介した一般書を用いることもある。4年生対象の「人文科学Ⅰ」では、英米の高校生レベルの教科書を用いることが多い。英文の具体例として、平成25年の「歴史Ⅰ」の前期末試験用に配布した英文を挙げる。出典は、現在アメリカで使用されている小学生用の歴史教科書である。

The Reformation was a religious revolt, or protest, against the Roman Catholic Church. A German clergyman, Martin Luther, was the person responsible for starting the movement in 1517. The church had grown very rich and powerful and nearly all European s were Catholic. However, some people questioned the church's authority when it began the practice of selling indulgences, or pardons, for sin. Believing you shouldn't have to buy your way into heaven, Martin Luther became angry. Luther believed that to gain heaven all you needed was to have faith in God. Luther listed this complaint and others on a statement called the Ninety-five Theses. He nailed this statement to the door of the church in Wittenberg, Germany. His writings were printed and distributed and his teachings began to spread over Europe. In 1519, Pope Leo X excommunicated Luther from the Catholic Church, and Holy Roman Emperor Charles V declared him an outlaw. While in hiding, he translated the Bible into German so people could read and understand it. Eventually, people left the Catholic Church to form their own churches. People who believed Luther's teaching were called Lutherans. Other Protestant movements began all over Europe.

(出典 : A. Zeman & Kate Kelly, *Everything you need to know about world history*, NY, 2005, p.79.)

図1. 平成25年度前期末試験用に配布した英文

事前配布した英文に加工を施し、試験問題を作成する。具体例として、平成25年度の「歴史Ⅰ」の前期末試験のうち、前述の英文を用いた箇所を以下に挙げる。

1. 以下の英文を読んで、各問いに答えよ。

The Reformation was a religious (A), or protest, against the Roman Catholic Church. A German clergyman, Martin Luther, was the person responsible for starting the movement in 1517. The church had grown very rich and powerful and nearly all Europeans were Catholic. However, some people questioned the church's (B) when it began the practice of selling indulgences (A), or pardons, for (C). Believing you shouldn't have to buy your way into heaven, Martin Luther became angry. Luther believed that to gain heaven (D) (B).

Luther listed this (E) and others on a statement called (①). He nailed this statement to the door of the church in (㉞), Germany. His writings were printed and distributed and his teachings began to spread over Europe.

In 1519, Pope who belonged to* the rich (②) family of Florence excommunicated Luther from the Catholic Church. At the Imperial Diet* of (㉟) in 1521, Holy Roman Emperor (③) declared him (④). While in hiding in (㊱) castle, he translated the Bible into German so people could read and understand itⒸ. Eventually, people left the Catholic Church to form their own churches. People who believed Luther's teaching were called Lutherans. Other ProtestantⒹ movement led* by a French clergyman, (⑤), began in (㊲) and spread all over Europe.

注：belong to ～に属する、～の出身の

Imperial Diet 帝国議会

led ～に導かれた (lead の過去分詞形)

問1：文章中のカッコ①～⑤に適切な語句を日本語で入れよ。(2点 x5=10点)

問2：文章中のカッコ㉞～㉟に適切な地名を日本語で入れよ。(1点 x4=4点)

問3：文章中のカッコA～C, Eに入る英単語を下から一つずつ選べ。(2点 x4=8点)

authority	complaint	default	penalty
regret	revolt	sin	

問4：文中のカッコDに入る英文を、下の英単語をすべて用いて作れ。(4点)

all	faith	God	have	in
needed	to	you	was	

問5：なぜ下線部Aを購入することが、to gain haven の近道となりうるのか。40字以上で説明せよ。(6点)

問6：下線部Bの神学思想は何と呼ばれているか。(2点)

問7：なぜ下線部Cが重要なのか。30字以上で説明せよ。(5点)

問8：下線部Dは、元々は「抗議する者」を意味した。彼らは、何に抗議したのか。40字以上で説明せよ。(6点)

図2. 平成25年度前期末試験の英語問題箇所

上記のような過去問題のうち、学生たちから「まるで英語教科のような問題だ」と批判・不評が寄せられる

のが、問3の英単語の穴埋めと、問4の英単語の並び替えである。この2問が、英語を通して歴史の知識を問うという趣旨から外れていることは確かである。なぜこのような問題を出題しているのかといえば、事前配布した英文を学生たちが自力で和訳するよう、促すためである。問3、4以外の問題は、自分で和訳をせずとも、(翻訳ソフトや他人の和訳を通じて)英文の内容を理解していれば、解答可能である。これに対して、問3、4は、英文の構造を意識しながら自分で和訳し、知らない単語は覚えるようにしないと正答を得られない。後述のアンケート結果が物語るように、英文を自分では訳さずに、翻訳ソフトを用いたり、他学生が和訳したものを丸暗記したりするだけの者は、それでもなお、少なからず存在する。ほぼ全員が自力で和訳に取り組むようになり、問3、4のような問題を出題せずに済むようになれば、理想的なのだが。

4-1. アンケート結果 (平成25年実施)

まず、図2の問題を受験した、平成25年度の1年生に対するアンケートの結果(平成25年10月実施。回答数は163名)を紹介する。

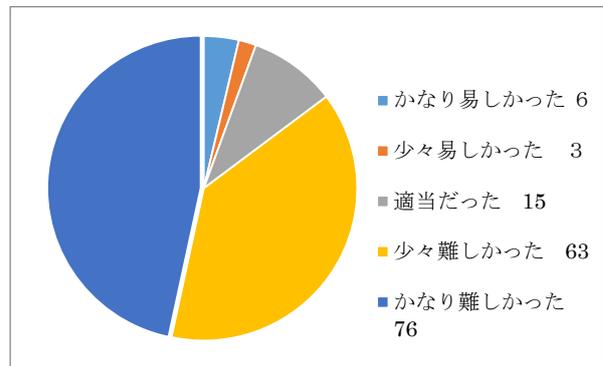


表1. 「Q1：英文の難易度」の結果(平成25年)

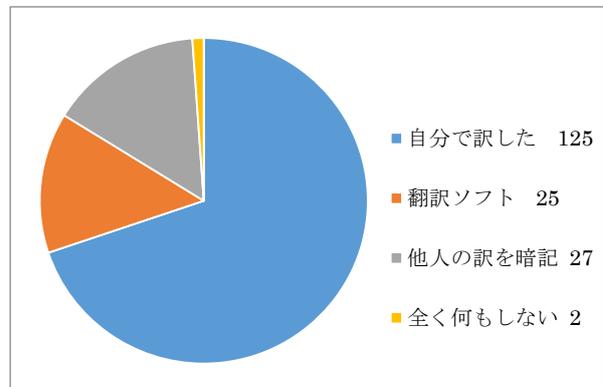


表2. 「Q2：英文対策(和訳の作成)」の結果¹(平成25年)

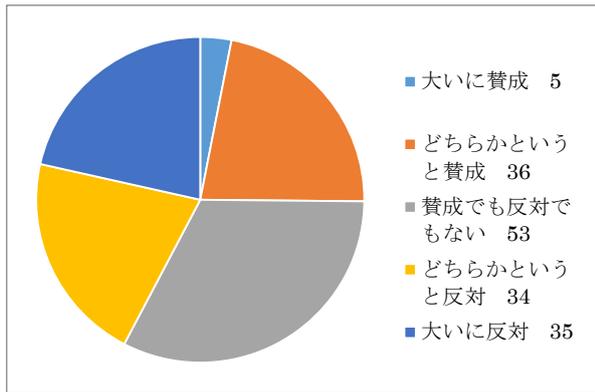


表3. 「Q3：歴史の試験で英文を活用することに」の結果（平成25年）

- 英文問題を易くして欲しい 25 票
- 英語は今後役に立つ 18 票
- 英文問題で得点を落としている 14 票
- 英語の実力がつく 14 票
- 英文問題の分量が多い 12 票
- 歴史に英語は不要 11 票
- きちんと準備すれば解ける 10 票
- 準備に時間がかかる 8 票
- 英語が苦手 7 票
- 英文を読むのに試験時間が足りない 6 票
- 得点を取りやすい 6 票
- 英単語を覚える負担が大きい 5 票
- 面白い 5 票

表4. 「Q4：Q3の回答の理由」（自由記述。5票以上の回答のみ表示）（平成25年）

これらのアンケート結果からは、次のような傾向を導き出せると思われる。すなわち、「歴史に英語は不要」というあからさまな先入観は少数派である。むしろ、「英語の読解力は今後必要になる」など、英語力向上のための手段として、英語以外の科目でも英語力を問うことは止むを得ない、との認識が強い。不満の多くは、事前配布の英文 or 英文問題の難易度に対するものである。ちなみに、Q2 で自分では訳さずに、「翻訳ソフト」、「他人の訳を暗記」と回答した者の大半が、Q3 で「大いに反対」、「どちらかというと反対」と答えており、これらの学生が最初から英文に拒絶反応を示していることが伺える。

4-2. アンケート結果（令和元年実施）

前述の試験およびアンケート実施から6年後の、令和元年度の前期末試験では、高松キャンパスの1年生に対して、再び同分野（16世紀の宗教改革）の英文を

使用した。英文の出典は、平成25年度のものとは別のアメリカの小学生の歴史教科書だが、レベルは同程度である。試験後、同様のアンケートを実施した（令和元年10月実施。回答数は164名）。

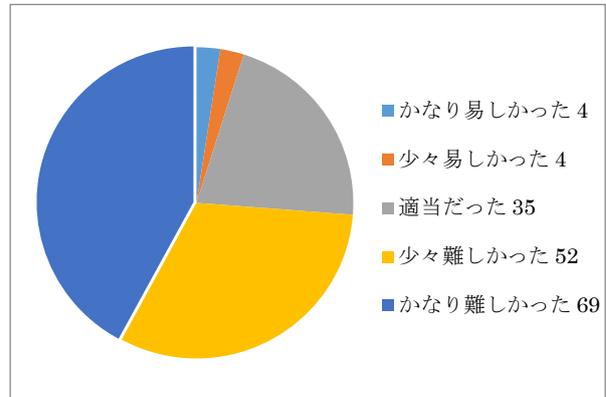


表5. 「Q1：英文の難易度」の結果（令和元年）

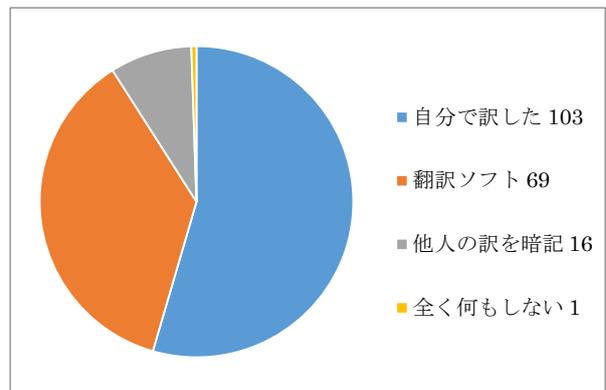


表6. 「Q2：英文対策（和訳の作成）」の結果²（令和元年）

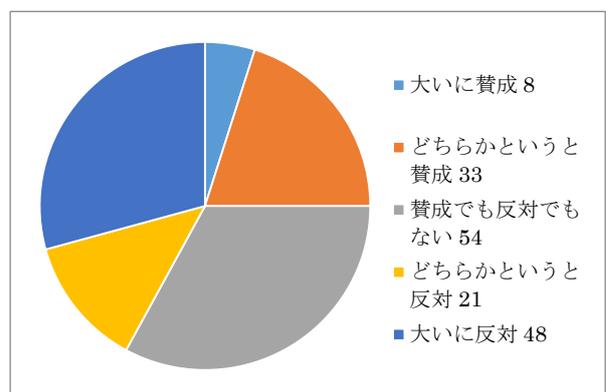


表7. 「Q3：歴史の試験で英文を活用することに」の結果（令和元年）

歴史に英語は不要	24 票
英語の実力がつく	18 票
英文問題を易しくして欲しい	17 票
準備に時間がかかる	16 票
得点を取りやすい	12 票
より深く歴史を理解できる	10 票
英語は今後役に立つ	7 票
英語が苦手	9 票
出題内容を予測できる	5 票

表 8. 「Q4 : Q3 の回答の理由」(自由記述。5 票以上の回答のみ表示) (令和元年)

6 年前のアンケート結果と比較して、「英文の難易度」(Q1) に関しては、「少々難しかった」と「かなり難しかった」の割合に、あまり大きな変化は見られない(平成 25 年が 85%、令和元年が 74%)。また、Q2 で、「翻訳ソフト」、「他人の訳を暗記」と回答した者の大半が、Q3 で「大いに反対」、「どちらかという反対」と答えているという傾向も、前回と同様である。

大きな変化が見られたのは、まずは「翻訳ソフト」の利用者が倍増していることであろう(15%→42%)。機械翻訳の精度が大幅に向上し、その利用が急速に普及している最近の社会状況を、如実に反映しているといえる。学生が翻訳ソフトに頼る傾向は、今後ますます強まるのであろう。

もう一つ顕著な変化が見られたのが、「歴史に英語は不要」という先入観が、こちらも倍増していることである(11 名→24 名)。教育の国際化を視野に、英語による英語授業はもちろんのこと、英語以外の授業も英語で行おうという取り組みが日本各地で試みられている昨今の状況とは、対照的な傾向である。

5. 今後の課題

まず必要なのが、増加傾向にある「歴史に英語は不要」という先入観を変えることであろう。そのためには、年度当初のオリエンテーションや、試験前の英文配布の際に、歴史の授業で英語を活用する意図・意義を、これまで以上に丁寧かつ繰り返し伝えることが不可欠だと考えている。また、翻訳ソフトに頼りがちな学生に対しても、安易な手段に逃げることなく、難解な英文にチャレンジすることが英語力向上につながることを認識させることも必要であろう。

もう一つは、英語に苦手意識をもっている学生への対応である。これまでの対策としては、希望者を対象に、彼らの和訳を個別に添削指導してきた。添削を求めてくる学生は、1、2 年生の場合、毎回それぞれ 30 名

程度(1 学年全体の 1/5) である。しかしながら、添削を希望する学生の大半は成績優秀者で、成績不振者が自作の訳を持ってくることは(切羽詰まった場合を除き)とても少ない。試験前に成績不振者を集めて補習を行ったこともあるが、英文を事前に和訳してやることを義務付けたにもかかわらず、ほとんどの者がやってこない。補習中、彼らは筆者の和訳解説をひたすらノートに書き写すだけで、自力での和訳による英語力向上という意味での効果は全く感じられなかった。英語に拒絶反応を示す者に、自力での和訳を強制するには、補習中に和訳をさせ、和訳を終えた順に個別添削するというやり方もあるが、この場合は教員の拘束時間が長く、通常の添削希望者への対応と並行して実施する余裕がないため、二の足を踏んでいるのが現状である。

注

1) 「自力で訳した後、翻訳ソフトで確認した」、「半分自分で訳し、半分翻訳ソフトを用いた」など、複数項目にまたがる回答は、「自分で訳した」と「翻訳ソフト」の両方にカウントした。そのため、総計は回答数を上回る。

2) 注 1) と同じ処理を施した。

参考文献

水野 知津子「香川高専学生の英語苦手改善・英語力向上への試み - 多読を考える - 『香川高等専門学校紀要』第 6 号、2015 年